

ヴィクトリア朝時代の友情 シャーロットとエレン

Victorian Friendships Charlotte and Ellen

芦澤久江

1. はじめに

ブロンテ家の子どもたちは、近所の子どもとは遊ばずに、きょうだいだけで遊んでいたために、内向性を強めたとされている。特にエミリ (Emily Brontë, 1818-48) は家を離れるとホームシックがひどく、生涯、友人や知人はいなかった。シャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) も他者と関わるのが得意ではなかったが、妹エミリ、アン (Anne Brontë, 1820-49) に比べれば、もっとも社交的であった。エミリとアンには友人がなかったのに対して、シャーロットにはエレン・ナッシー (Ellen Nussey, 1817-97) とメアリ・テイラー (Mary Taylor, 1817-93) という生涯の友がいたことから明らかである。特にエレンとの交流はシャーロットにとって大きな心の支えであり、精神修養にもつながったとすることができる。

ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) の『シャーロット・ブロンテの生涯』 (*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) に示されているように、シャーロットはエレンと日常の些末な出来事から結婚観、人生観を手紙で語りあい、それによってお互いに切磋琢磨しながら、精神的成長を遂げている。しかしヴィクトリア朝時代の女性同士の友情は、今日とは異なった目的、意味が含まれていた。そこで小論では、二人の友情関係がいかなるものであるか、またヴィクトリア朝時代の友情の役割とはどのようなものか、考察していきたい。

2. シャーロットの手紙

シャーロットの生きていたヴィクトリア朝時代において、コミュニケーションのツールは手紙であった。そのためシャーロットは友人エレン、メアリだけでなく、恩師マーガレット・ウラー (Margaret Wooller, 1792-1885)、出版社エイロット・アンド・ジョーンズ社 (Aylott & Jones)、スミス・エルダー社 (Smith Elder)、スミス・エルダー社の顧問ウィリアム・スミス・ウィリアムズ (William Smith Williams, 1800-75)、作家ギヤスケル、ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau, 1802-76)、エジェ先生 (Constantin Héger, 1809-96) などさまざまな人と手紙を通じて交流を続けていた。

ただ手紙がすべて保管されていたわけではないと考えられるので、その他の人々とも手紙の交換をしていた可能性はある。しかし個々の手紙の内容を調べていくと、そのなかにさまざまな人々の

名前が挙がっており、手紙の相手との交流だけではなく、さらなる交流関係が立体的に浮かび上がってくる。その点で、手紙はシャーロットの日常生活を知るうえで、非常に有益なドキュメントといえるであろう。

しかし驚くべきことに、シャーロットの手紙は残っているものの、シャーロットのもとに送られた手紙をシャーロットは保管していない。シャーロットの友人エレンはギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』を書く際に、自分が持っていたシャーロットの手紙をギヤスケルに300通以上貸し出したと言われている。すなわちエレンはシャーロットが有名な作家になるとは夢にも思わずに、大事な友人の手紙として保管していたけれども、シャーロットはエレンの手紙を一切保管していなかったということである。シャーロットがエレンに300通以上の手紙を書いたことを考えると、エレンも少なくともそれと同数の手紙を書いたと推測される。シャーロットはエレンに限らず、他の人々から受け取った手紙も残していないので、シャーロットの文通相手がどのような返事をしたのかわからない、要するに一方的な文通となっているのである。

エミリー・ブロンテ (Emily Jane Brontë, 1818-48) が秘密主義者であったことは知られているが、シャーロットが友人たちの手紙を残さなかったのもそれに関連しているのかもしれない。姉妹で詩集をペンネームで出版したり、またシャーロットが『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) を出版したときもペンネームを使い、出版社のスミス・エルダー社もシャーロットたちがロンドンに行って正体を明かすまでは、『ジェイン・エア』の作者が誰か知らなかったほどである。また『ジェイン・エア』出版を父親にさえ話していなかったということを見ると、シャーロットはエミリーほどではないにしても、秘密主義者だったといえる。したがって、シャーロットが私生活の暴露を恐れて、手紙を破棄していたということは十分考えられる。実際、友人のメアリ・テイラーはシャーロットが有名作家になり、手紙から個人情報公になることを心配して、シャーロットの手紙をすべて破棄してしまっていたのである。それゆえ『ジェイン・エア』が成功し、名声を獲得したシャーロットが、私生活が公になることを恐れ、手紙をすべて処分していたということは当然のことである。

前述したように、シャーロットは相手の手紙を破棄してしまったため、シャーロットの手紙に対して、文通相手がどのような返信をしたかは明らかではない。それにもかかわらず、シャーロットの手紙をつなぎあわせれば、文通相手がシャーロットにどのような質問をし、どのような話題を求めてきたかは想像できる。つまりシャーロットの相手の反応を読者の想像によって補えば、シャーロットの考えが立体的、重層的に浮かび上がってくるのである。

シャーロットのエレンへの手紙を検証する前に、シャーロットが初めて書いたとされる手紙 (Smith, I, 105) を考察してみたい。シャーロットは1823年9月23日、トッドモーデン近郊のクロスストーン司祭館から父親 Patrick Brontë (1777-1861) に宛てて手紙を書いている。

My dear Papa,

At Aunts, request I write these line to inform you that “if all be well” we shall be at

home on Friday by dinner time, when we hope 'to' find you in good health—On account of the bad weather we have not been out much, but notwithstanding we have spent our time very pleasantly, between reading, working, and learning our lessons, which Uncle Fenell had been so kind as to teach us every day. (Smith,I,105)

シャーロットは母親の叔母が亡くなり、伯母のエリザベス・ブランウェル (Elizabeth Branwell,1776-1842) に連れられて、妹弟とともにクロスストーン司祭館に滞在し、「伯母に頼まれて (“At Aunts, request”)」(Smith,I,105) 手紙を書いている。スミスによれば、シャーロットの “At Aunts, request” のコンマはエリザベスあるいはパトリックがのちに付けたと思われるが、ミススペリングはそのままになっている (Smith,I,105)。急いで手紙を書いたためにシャーロットはミススペリングや句読点をし忘れたのかもしれない。しかしそれ以外に特に注目すべきことはなく、一般的に子どもが親に送る手紙のように、シャーロットは滞在先での過ごし方を父親に伝えているだけで、ここから天才を予想させるような萌芽を見出すことはできない。それどころか、前述したように、句読点を修正されているように、13歳の手紙にしては子どもじみているとさえ言えるかもしれない。ただ、特に際立ったものがない手紙だが、手紙は日付、場所も記され、その日に起こった出来事も記録されているので、伝記的資料として非常に重要なものである。

この手紙を書いた二年後の5月11日付けの手紙から、シャーロットはエレンとの文通を始めている。

Dear Ellen

I take advantage of the earliest opportunity to thank you for the letter you favoured me with last week and to apologize for having so long neglected to write to you, indeed I believe this will be the first letter or note I have ever addressed to you. I am extremely obliged to your Sister for her kind invitation and I assure you that I should very much have liked to hear Mr Murray's lecture on Calvinism as they “would” doubtless have been both amusing, and instructive. (Smith,I,109-10)

この手紙から明らかであるように、最初に手紙を出したのはエレンの方で、シャーロットはエレンの手紙を受けて返信をしている。そのうえシャーロットは長い間返信をしなかったために、そのことを詫びている。したがって、いつエレンから手紙を受け取ったのか、どれくらい返信をしなかったはわからない。しかしシャーロットは次の手紙でもまた、ロー・ヘッドを離れてもエレンが約束を守り手紙をくれたことに感謝をしている。

Dear Ellen

The receipt of your letter gave me an agreeable surprise, for notwithstanding your

faithful promises you must excuse me if I say that I had little confidence in their fulfilment, knowing that when School girls once get home they willingly abandon every recollection which tends to remind them of school & indeed they find such an infinite variety of circumstances to engage their attention and employ their leisure hours that easily persuaded that they have “no time” to fulfil promises made at school it gave me great pleasure however to find that you and Miss Taylor are exception to the general rule. (Smith,I,110-11)

この手紙からいくつかのことがわかる。まずロー・ヘッドを離れてから、シャーロットは手紙を書く約束をエレンだけでなく、メアリともしており、「一般原則があなたとミス・テラーにはあてはまらない（“you and Miss Taylor are exception to the general rule”）」(Smith, I, 110-11)と述べていることから、メアリもまた、約束を守ってシャーロットに手紙を書いたということが推測される。

一方シャーロットは友人と約束しても、友人が手紙を書いてくれるかどうかは懐疑的な様子で、これはまさにシャーロットがものごとを悲観的に見る癖があったことを表している。シャーロットの性格を心理学的に分析すると、ラングブリッジ (Rosamond Langbridge) はうつ病の傾向にあったと見なし (181)、デューリー (Lucile Dooley) はノイローゼであったと主張している(231,263)。

ギヤスケルが「彼女たちは一か月に一回文通することに同意していた（“they agreed to correspond once a month”）」(145)と述べているように、1833年1月1日の日付の手紙で「わたしたちは月に一度ずつ文通することにしたいと思います。（“I believe we agreed to correspond once a month…”）」(Smith,I,120)とシャーロットが書いているので、1か月に1度文通をすることになったようである。実際には、そのような約束を取り交わしていたが、残された手紙を検証してみると1か月に1回という頻度ではなく、時には半年近く書いていない時もあり、当初の1か月に1回という約束は守られていないうえ、つねにシャーロットの返信が遅れていたと思われる。それでも、エレンとの文通は亡くなるまで続けられていたのである。

前述したように、シャーロットはものごとを悲観的に見る傾向が強かったが、次の手紙においても、それが示されている。

Dearest Ellen

Your letter gave me real, and heartfelt pleasure, mingled with no small degree of astonishment. Mary Taylor had previously informed me of your departure for London and I have not ventured to calculate on receiving any communication from you while surrounded by the splendours, and novelties of that great city, which has been called the mercantile metropolis of Europe. Judging from human Nature, I thought that a little country girl, placed for the first time in a situation, ‘so well’ calculated to excite

curiosity, and to distract attention, would lose all remembrance for a time at least of distant and familiar objects, and give herself to entirely to the fascination of those scenes which were then presented to her view. (Smith,I,126)

ここではエレンがロンドンへ行き、大都会で初めて見る光景に夢中になって、これまで馴れ親しんだものを忘れてしまうのではないか、ということをシャーロットが恐れていたことがわかる。しかしエレンはシャーロットが想像していたのとは違い、ロンドンでの様子をシャーロットに手紙で書き送り、エレンがシャーロットを忘れずにいたことが彼女に喜びを与えている。

この手紙で注目すべきことは、書き出しの“Dearest Ellen”で、“Dear”の最上級の形容詞を使っているということである。おそらくシャーロットはエレンが大都会に心を奪われず、自分に手紙を書いてくれたという喜びを、単なる“Dear”ではなく、“Dearest”という言葉に込めて表現したと思われるのである。その後、エレンがロンドンから戻ったとき、無事帰って来たことをシャーロットが喜ぶ手紙において、最初の見出しは“My own dear” (Smith,I,128)と書かれ、まるでエレンは恋人であるかのような扱いになっているのである。

さらにシャーロットのエレン宛ての手紙で特徴的なことは、シャーロットは自分の手紙がエレンを退屈にさせてしまい、郵便代を払わせるほどの価値があるか、あるいは自分自身がエレンにとって価値があるかどうかということをつねに気にしている。エレンがどのように答えていたかはわからないが、当然否定的なことは書かなかっただろう。シャーロットは自分自身が他人に好かれる人間なのかどうか、確信がもてないので、エレンにそのことを再三手紙で確認しているのである。

それは子どもの頃から、きょうだい以外の子どもと遊ぶことをせず、他者との接し方がわからなかったということが原因かもしれない。ジェインがそうであったように、ロー・ウッドで初めて友人ができ、ようやくきょうだい以外の人々とのつながりができたのである。それゆえ、シャーロットがエレンとの友情関係を保っていく自信をもてなかったのは当然であるかもしれない。しかしラングブリッジが述べているように、シャーロットには強い自己抑圧があり (185-86)、それによって自分を肯定することができず、つねに自己存在の不安を抱えていたのかもしれない。

シャーロットとエレンの友情は、手紙を交わすたびに、ますます深くなっていくどころか、恋人に宛てたラブレターの様相を見せていく。1834年から1835年は手紙自体があまり書かれていないが、この二年間の手紙はすべてエレンに宛てたものであり、特に1835年3月13日付の手紙では、ラブレターのように、エレンを恋しがらるシャーロットの気持ちが書かれている。シャーロットがロー・ヘッドを退学したのは1832年7月で、その2か月後シャーロットはエレンの家を訪れ、彼女と再会しているが、それ以降は会う機会がなかったので、エレンへの想いが一層募っていたのであろう。

Well, here I am, as completely separated from you as if a hundred instead of seventeen miles intervened between us. I can neither hear you, nor see you, nor feel you, you are become a mere thought, an unsubstantial impression on the memory which

however is happily incapable of erasure. (Smith,I,136)

シャーロットはエレンと離れていることを嘆き、声が聞けない、会えないと訴えている。このようなエレンに会いたいという気持ちはまさに恋人関係のようである。さらにシャーロットは自分が憂鬱な気分有的时候には、エレンを思い浮かべると述べ、その切ない気持ちを次のように書いている。

‘What shall I do without you? How long are we likely to be separated? Why are we to be denied each other's society? It is an inscrutable fatality. I long to be with you, because it seems as if two or three days, or weeks, spent in your company would beyond measure strengthen me in the enjoyment of those feelings which I have so lately begun to cherish…Why are we divided? Surely it must be because we are in danger of loving each other too well… (Smith,I,164)

シャーロットは前述した手紙のように、二人の間が割かれ、一緒にいられないことを強く悲しんでいる。そしてその感情はさらに高揚して、「お互いに愛しすぎて (“loving each other well”)」 (Smith,I,164) いるとさえ言っている。これまでの手紙ではエレンに値しない人間ではないか、捨てられるのではないかと述べていたが、ここでは二人がお互いに愛している、いやそれどころか愛しすぎて危険なので、神様が離れ離れにしているのだと述べていることから、一方的な片想いではなく、お互いが愛し合っていると確信するようになっていくうちに、お互いの性格を理解し、また、心の支えとなるほど信頼し合うようになっていたのである。

一方エレンもまたシャーロットと同じように、シャーロットから捨てられるのではないかと不安に思っていたようで、それに対してシャーロットは「わたしがあなたを捨てるなんて言わないでください (“Talk no more about my forsaking you”)」 (Smith,I,249) と述べている。このように、シャーロットだけでなくエレンもまた、互いに相手の気持ちが冷めてしまうのではないかと心配しながら、相手の気持ちを確かめている点は恋人同士の恋愛感情と同じである。

シャーロットが恋愛感情を抱いた相手と言えば、エジェ先生である。シャーロットがエジェ先生に宛てた手紙は1844年から1845年までの4通である。シャーロットが「お手紙を書く番ではないことを十分承知しています。 (“I am well aware that is not my turn to write you…”)」 (Smith,I,357) と書いていることから明らかであるように、エジェ先生からの手紙を少なくとも一回は受け取っていたようであるが、その後はシャーロットが一方的に書き、エジェ先生に手紙を書く赦しを得ている。エレンとの文通では、シャーロットがエレンへの返信の遅れを詫びたりしていたが、手紙を書く赦しを得るというものではなかった。ところがエジェ先生の場合、今度はシャーロットが手紙を書く番ではないとわかっていながら、いたたまれずに手紙を書き、それをエジェ先生に詫びているのである。手紙の返信を待ちわびて耐えきれずにシャーロットはエジェ先生に次のような手紙を送っている。

Monsieur, the poor do not need a great deal to live on—they ask only the crumbs of bread which fall from the rich men's table—but if they are refused these crumbs—the y die of hunger—No more do I need a great deal of affection from those I love… I cling to the preservation of this little interest—I cling to it as I would cling on to life. (Smith,I,379)

シャーロットはエジェ先生には異性として恋愛感情を抱き、一方通行の片思いであったので、エレンへの気持ちと多少異なるかもしれないが、相手の手紙を待ちわびるという点では同じである。異なる点は前述したように、エレンからは返信があったが、エジェ先生からはなかったということである。しかしながら、エレンから返信があっても、シャーロットはエレンが自分を忘れてしまうのではないかと危惧しているように、異性を思う恋心と差異がないように思われる。

エレン宛の手紙にはシャーロットの熱烈な想いが書かれているだけでなく、自分の性格の悪い部分、特に怠けていることをエレンに打ち明けて、自己を反省している点も見られる。エレン宛ての手紙を引用してみよう。

My dear, dear Ellen

I am this moment trembling all over with excitement after reading your note, it is what I never received before—it is the unrestrained poring out of a warm, gentle, generous heart, it contains sentiments unstained by human motives, prompted by the pure God himself, it expresses a noble sympathy which I do not, cannot deserve… I do wish to be better than I am. I pray fervently sometimes to be made so. (Smith,I,162)

シャーロットはエレンが温かい心で接してくれることに感謝するとともに、自分自身も今より良くなって向上したいと願っている。シャーロットはエレンとの対話を通じて、内省し、精神的成長を遂げようとしていたのである。

これまで見てきたように、エレンとの文通はシャーロットにおいて大きな意味を持っていたといえる。最初シャーロットは、エレンが文通の約束を守ってくれるか半信半疑であったが、それは言い換えればシャーロット自身が約束を守れるのかどうか自信がなかったということである。しかしエレンが誠実に約束を守ってくれたことによって、二人の間に信頼関係が生まれ、エレンはシャーロットにとって本当の意味で友人となり、強い絆で結ばれていった。それにもかかわらず、お互いに自分のことがいつか忘れられてしまいのではないかという不安に陥っている点は、恋人同士の愛のさえずりのようなものである。お互いの愛をささやき、時には不安に駆られ愛を確認し合い、さらには相手にふさわしい自分になろうと自己修練さえしている。したがって、シャーロットの成長にエレンは大きな役割を果たしているのである。ところがこの女性同士の友情はヴィクトリア朝時代においては特別な意味があったのである。

3. ヴィクトリア朝時代の女性同士の友情

前述したようにシャーロットとエレンはお互いに愛情を育み、成長していった。友情とはいつの時代もそのようなものとして考えられているかもしれない。しかしヴィクトリア朝時代における女性同士の友情は特に重要なものであった。当時ヴィクトリア朝時代は、“separate spheres”の時代であり、ジェンダーの役割がはっきりしていた。すなわち、女性は男性の付属物として権利をもたず、家庭のなかでの務めを果たす「家庭内天使」の役割が求められていただけでなく、礼節さ、従順さ、忍耐が女性の美德とされていた。

こうしたジェンダー・イデオロギーのもと、ヴィクトリア朝時代の秩序は保たれ、その手引書となったのがエリス (Sarah Stickney Ellis) の *The Woman of England* (1839) であった。それはヴィクトリア朝時代の女性の礼儀、マナーを教えるコンダクト・ブックであり、人々は娘として、妻として、女性としてどのように振る舞えばよいかを、その本を通じて学んでいたのである。その中で興味深いことは、エリスが女性同士の友情についても書いていることである (Marcus 25)。

マーカス (Sharon Marcus) は、エリスがヴィクトリア朝時代において女性同士の友情と男性求婚者に同等の価値を置き、女性同士の友情は欠かせないものであったと述べているにもかかわらず、多くの研究者はこれを見逃していると述べている (25)。またマーカスはヴィクトリア朝時代の友情は社会の中心であり、男性との関係だけで女性が定義されているのではないとも主張している (25)。

それではなぜ、女性同士の友情がヴィクトリア朝時代において重要だったのだろうか。マーカスによれば、女性同士の友情は男女間の結婚において、非常に有益なものだった。男女間の結婚はヴィクトリア朝時代において最高の価値を与えられ、女性のゴールは結婚であった。ヴィクトリア朝時代の人々が女性同士の友情を受け入れたのは、友情が女性らしい思いやり、利他主義を促進させ、友人は良き仲間となることができると思っていたからである (Marcus 26)。すなわち結婚する前に、友情を通して疑似的恋愛を経験することで、女性たちは愛情をもって相手を尊敬し、信頼するという他者との関係を学ぶことができる。そしてそれはやがて男女間の結婚に置き換えられ、友情で培った経験から、女性は妻として夫を愛し、安定的で幸せな結婚生活を営むことができるようになる。エリスが女性同士の友情を提唱した目的はそこにあったのである。したがって、女性同士の友情は家族の間でも是認され、シャーロットの手紙にもあるように、当時の女性が言うには憚られるような愛の言葉を言うことも、女性間の友情では許されていたのである。つまり一般的に知られているように、ヴィクトリア朝時代においてジェンダーの違いをはっきりと区分し、異性間の結婚に最大の価値を置いたのは、それによって国の繁栄、安定をもたらす、社会秩序を保とうとするジェンダー・イデオロギーが働いていたからである。そのようなジェンダー・イデオロギーのなか、女性同士の友情は、異性間の結婚に有用なものに見なされ、推奨された。それゆえヴィクトリア朝時代の女性同士の友情は特別な意味を持っていたのである。

マーカスによれば、女性同士の友情はヴィクトリア朝時代の規範のなかに収まりながらも、女性

たちに自由を与える柔軟なシステムでもあった (27)。その意味で、ヴィクトリア朝時代の女性たちは社会から抑圧されていたとされている一般的な概念は覆され、ヴィクトリア朝社会は私たちがこれまで想像していたよりも柔軟な社会システムをもっていたのである (Marcus 26-27)。

4. おわりに

これまで見てきたように、シャーロットの人生にとって、エレンの存在は家族同様に大きいものであった。エレンとの手紙のやりとりは、シャーロットの心の支えだけでなく日常生活の唯一の楽しみでもあり、自己修養を促すものでもあった。前述したように、エレンの手紙で『シャーロット・ブロンテの生涯』が構成されるほど、シャーロットの人生の多くをシャーロットはエレンとともに歩んでいたことになる。

レズビアン研究において、女性同士の友情を家族と結婚の歴史に組み入れることを主張しているのはスミス・ローゼンバーグ (Carrol Smith-Rosenberg) などがあるが (366, 372, 373)、レオノア・デイヴィッドフ (Leonore Davidoff) やキャサリン・ホール (Catherine Hall) は、友情は家族のジェンダー政治学とは無関係としており (402-3)、ギリス (John Gillis) も女性同士の友情はレズビアンの連続体と考え、家族と結婚への抵抗であるとしている (14, 136-38, 142)。

しかしエリスが提唱しているように、女性同士の友情は真の愛情の基本であり、良い妻となるための訓練として、友情はヴィクトリア朝時代に積極的に促進された。実際、そのようなジェンダー・イデオロギーのもと、シャーロットとエレンの友情も育まれていったのは確かである。だがここでマーカスが述べているように、女性同士の友情は、エリスが目的としたヴィクトリア朝時代の異性間の結婚の促進としてだけの役割ではなく、当時の結婚における主従関係から女性を解放し、平等主義の観念へ移行するものでもある (27)。それゆえシャーロットとエレンは友情によって、当時の男女における主従関係から解放され、対等な立場で語り合い、切磋琢磨し、愛と信頼を育てていったと言えるのである。

参考文献

Davidoff, Leonore and Catherine Hall. *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class 1780-1850*. Chicago UP, 1987.

Dooley, Lucile. "Psychoanalysis of Charlotte Brontë, as a Type of the Woman of Genius", *American Journal of Psychology*, vol. 31, no. 3, July 1920, pp. 393-416.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Edited by Alan Shelston, Penguin, rep.1985.

Gillis, John. *For Better, For Worse: British Marriages, 1600 to the Present*. Oxford UP,

『静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部 紀要第21号』

1985.

Marcus, Sharon. *Between Women*. Princeton UP, 2007.

Langbridge, Rosamond. *Charlotte Brontë: A Psychological Study*. William Heinemann, 1929.

Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë: 1829-47*. Vol I. Clarendon, 1995.